

清流

題 字 : 芳野 充

令和7年12月30日

第108号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

心を浄化するひとり旅

十一月十九日から二十一日、二泊三日でひとり旅にでかけてきました。予定では四国にしようと思っていたのですが、熊騒動が気になりましたので今年は大分県国東半島に足をのばしました。宿泊先が山奥に位置するため、移動は交通機関ではなく自家用車です。

初日は両子山周辺を七時間ほど歩き、二日目は宿泊先の管理人さんのつよいすめで、大不動岩屋という場所周辺を歩くことにしました。

十一月もなかばを過ぎた早朝。まだ星が見える空の端がほのかに朝焼け色へとかわり、朝陽をまつ凜とした空気がからだをつつみ、場所のせいなのかとても神聖な雰囲気です。誰もいない山道はだんだんとあかね色に染まり、その光が木々のすき間から幾重にもさしこむ幻想的な道をただひとりもくもくと歩いていると、自然と感謝のきもちがこんこんとわいてくるのを感じます。

大不動岩屋とは切り立った崖面にぽっかりと広い空洞があり、空洞奥には不動明王がまつられています。不動明王に手をあわせたとふり返ると、眼前には朝陽をあびてまぶしい朱色にそまる巨大な奇岩が塔のようにたちならんでいました。

しばらくその情景をしばらくながめながら、その場にあぐらをかき、目をとじ瞑想をおこないました。わたしはなんと小さく、そしてなんと傲慢な存在なのだろう、という反省と、こんなわたしを生かしてくれている存在への感謝の念がじんわりとわき出てきました。この心が浄化される感覚を心に植えつけるようにたつぷりと味わったあと、不動明王にお礼をつたえふたたび歩きだします。

腕時計は外しスマートフォンもオフのまま、心地よい空腹感をおともにただひたすら歩きつづけます。二日目のこの日は、帰るための交通機関の時間など気にせず、何も考えず気のゆくまま足のゆくままただ歩くだけ。頭もからだも空っぽになり、やさしくおだやかな心で満たされます。このとき体感するのは、自分の身のうえにイヤなことツライことがあってもムリなく受容でき、自分の未熟さに気づきやすくなるということです。

三日目は早朝からいなか道を歩き、お昼すぎに今年のひとり旅を無事に終えることができました。帰る道中、二日目の朝に心が浄化された感覚をいま一度よびさまし、それを味わいながら帰路につきました。

三日間も連絡がとれない状況を、家族や職場のスタッフが理解してくれているからこそできる有難い時間です。これをわたしひとりが満足するのではなく、ひとり旅で得た感覚を日常のなかでもよびさまし、すこしでもおだやかで素直な人に近づき、まわりに安心と喜びを届けることができるわたしでありたいと願います。

加来 寛

